

會學濟經學大國帝都京

# 叢論經濟

號二第 卷三十二第

行發日一月八年五十五大

## 論叢

伊太利に於ける農業社會化運動 . . . 教授 法學博士 河田 嗣郎

地方家屋稅の當否 . . . 教授 法學博士 神戸 正雄

生産の概念 . . . 九州帝國大學 教授 文學博士 高田 保馬

動物界の鬭爭 . . . 教授 理學士 川村多實二

## 時論

軍備縮小會議に就いて . . . 教授 法學博士 末廣 重雄

## 說苑

羽州庄内農民愁訴騒動 . . . 教授 經濟學士 黒正 巖

足袋の製造工程 . . . 法學士 本多 芳郎

琉球の史的回顧 . . . 教授 法學博士 山本美越乃

## 雜錄

我國古代の財政と佛教 . . . 教授 經濟學博士 本庄榮治郎

間接消費稅の累進稅率 . . . 助教授 法學士 沙見 三郎

クナップ教授逝く . . . 經濟學士 菊田 太郎

## 法令

勞働爭議調停法・勞働爭議調停法施行令・工場法施行令中改正・工場法施行規則中改正・商事調停法・土地貨賃價格調査法

(禁轉載)

# 動物界の闘争

川村多實 二

人類の無節制なる性慾をば一般世人が獸慾と稱して居るにも拘はらず、其實かゝる不自然なる快感享樂に耽るものは人類以外の獸類には皆無であつて、唯動物園の類人猿に人間が悪戯に教へた自慰の醜癖が見られるだけである。之と同様に、人類が相戦ひ相殺す場合、多くの人々はそれを以て、人間の心の底深く潜んで残存するところの或野獸性が再び出現したものと様に解釋されるけれども、實は人間程殘忍なる闘争を頻繁に行つて居る動物は他に無く、しかも夫が人間になつて初めて起つたものと謂つてよいのである。人類闘争の原因に就ては茲に改めて論ずる迄もないが、次の動物界の闘争なるもの、真相を説明して、人間の場合に對比せしめ、曖昧なる「闘争本能の存在」を人性に假定せんとする一部の人々の參考にし度いと思ふ。

抑も普通動物界の闘争と呼ぶるもの、中に、次に示す如き性質の全く違つた幾種かの行動が混在することを知らぬ人が少くないやうである。私は假りに次の四類を區別して述べることにする。

## 第一 食物を前にしての闘争

試みに猿の檻や鶏の群に一片の食物を投げ與へれば、彼等が如何に競うてそれを争ふか、分る。豹や狼が獲物を争ふ場合などは一層激烈であるかも知れない。然し此種の闘争は動物界全體から見れば、寧ろ甚だ稀なる可き理由があるのである。それは若し此仲間を排除せんとする行動が人間に見る如き有意識的智能性のものであるならば、他人の参加によつて自己の分け前が減せられるといふことの推理を必要とするから、智能の除程發達したる肉食性鳥獸又は家畜類に限られる、而してそれも直接目前に食物の存在する場合であつて、未來の利害を打算して相戦ふといふやうなことは、動物の智能として到底あり得ないことである。夫れ故に智能の發達の度の極弱い下等の動物では右の如き食物争奪の行動は少しも見られないのが當然である。桑の葉を食ふ蠶は、葉一枚に何匹たかつても闘争は初まらぬ。(但し種々の状況から甲乙の所得に厚薄があり、それがために優勝劣敗の結果即ちダーウィンの所謂生存競争も起り得るが)。

次に若し先天的本能として自分と同じ食物をねらふ仲間を排し壓制せんとする行動が進化發達して居るとするならば、それは特に食物の不足を訴へ勝ちなる或生活法を執つて居る動物の場合である(第三の項参照)。從來下等動物の食物に關した闘争と考へられたものは、之よりも寧ろ狩

獵本能又は之に類した肉食動物の攻撃攝食の行動、若しくは恐敵に對する自衛防護の行動を混同誤解したのである。途で行き逢つた二匹の犬が噛み合ふのは、彼等が常に迫害を受けることによつて習得した智能性の防護手段であつて、眞に野生の犬ならば直ぐ目の前に食物が横たはる場合でなければ同類相争ふことはしない筈である。檻の中の二匹の虎は若し食物を與へられなければ、揃つて餓死するまでも、相殺さうとはしまし。共喰ひといふことは本能の錯誤であつて、常規の攝食方法として之を賦與せられたる動物は一も無い。誤つて自分の子を食ふ動物は屢あるがそれが正常なる生活方法で無いのと同理である。

肉食動物が他種の動物に戦を挑むことは、恰かも現代文明國民が病原菌の制壓を一日も休止し得ざるが如く、冬季のエスキモー——人種の生活には海獸を屠ることが絶對に必要であるが如く、それ等行動はそれ等の動物に運命づけられたる絶對的生活方法なのである。夫故此害敵又は食物となる可き他動物に對する攻撃防護の手段は、敢て智能の出現發達を待つまでもなく、アメーバの如き原始的動物と雖も皆夫れ相當に具備するところの反射的行動であるが、之は決して眞の闘争と混同す可き現象ではなく、寧ろ吾々の魚介を漁り猛獸毒蛇を防ぐ行動に比す可きものである。或はそれでも異種類間の闘争だと云ふ人があるかも知れぬが、さういふ意味の闘争なれば動物界全般に行き亘つて、無い所はない。

## 第二 異性を前にしての闘争

生殖時期に雄同志激烈なる闘争を爲す動物が少くない。鹿の類では雄が双方から勢込んで突かかつた機みに、角が搦み合つていくら引張つても離れず、双方繋つたまゝで山中に餓死することがあつて、此角を捨てて陳列して居る博物館等もある。平素甚だ柔和なる野生の山羊や羚羊なども、此期節に入れば盛んに相闘ふので、屢高山中の岩盤上に特に定まつた決闘場があつて、敗者の死骨が堆く積まれてあるといふ話もある。特定の決闘場といふのはちと受取れぬが、足場のよい所に幾匹かの雄が集まつて雌の面前で激戦をすることは周知の事實である。鳥類にも亦同様なる例が澤山あつて、平常は無關係に飛び廻つて居る雄が、此時に限つて此處彼所に集まつて闘争を行ふ、中には此目的のために此季節に下肢や翼に鋭い距が發達するものもある。而して此場合も亦哺乳類の場合と同じく、カモ、シギ、バン、蜂鳥の如き平素頗る柔和である種類に却て多く見られることは注目に値するのである。右と同様なる闘争は鳥獸以外の下等動物にも澤山あることで、蛙、蜥蜴、棘魚、蜘蛛、兎虫等が其例である。即ち此行動は強ち智能の發達とは關係なく、本能として高下の動物に廣く行き亘つて居る性質である。此闘争に當つて鹿や山羊が果してどの位自己の行動を認識して居るかは明瞭でないが、此闘争に勝つことによつて愛する雌を獨占しや

う等といふやうな理解がありとは、彼等の腦髓の發達から推して到底考へられないことである。犬や猫の雄が雌を争つて嘯み合ふことは、前項に述べた好餌を前にして初めるところの智能的闘争の中に數へてもよいかも知れぬがそれは極稀なる場合である。況して下等の動物では此闘争は單に彼等の體の生理的状況がなさしめるところの無意識的行動と謂はねばならぬ。

之に關聯して注目す可き事實として、此闘争が元來相手の雄を斃すといふことを目的とせずして、雌をして觀覽せしめんとする趣旨に基づいた行動即ち「見もの」と考ふ可き證據がある。例へば或人が十匹程の雄蜘蛛を一匹の雌と共に箱の中に入れて置いたら、晝夜間斷なく激烈なる戦闘をやつたが、然し二週間を経ても一匹の負傷者をも出さなかつた事實がある。即ち生殖時期の雄同志の闘争は眞の闘争でなくて闘争の演劇即ち見せもの(術語では Scheinkämpfe といふ)に外ならぬのである。してみれば、或種の鳥獸や蜘蛛などに見られる、雄が雌の面前で舞蹈を爲す場合とも全然引き續きの現象である。吾人々類の場合に、野蠻人の舞蹈といへば大抵戦闘の眞似であること、思ひ合せて頗興味あることであるが、右の動物の場合では闘争であつても又此舞蹈にしても、全くその本來の目的とする所に差違はない。即ち(犬猫等の場合を除けば)之によつて雌に對する性的刺戟を送らうといふのが主で、競争者を倒さうとするのではない。

雌に性的刺戟を送る方法としては一匹の雄が單獨に一匹の雌に向つてする行動の方が寧ろ普通

である。例へば高聲に歌を唱ふとか、體を摩擦して美音を發するとかの如きである。然し此方法にも柔しいのと亂暴なものとがあり、中には嘴で雌の背を突つくやうなものもある。此亂暴なる方法を一匹の雄が單獨に雌に向つて行ふ代りに、二匹の雄同志でやり合つて、その光景を雌に觀せる場合が即ち、本項に擧げたる異性を前にしての闘争に過ぎない。

### 第三 社會生活に伴うて起つた戦争

私は本誌第二十二卷第四號に動物界の食糧問題を論じたときに、生活方法としては寧ろ無理なる社會生活を遂行するために動物界に種々なる進化が起つたことを述べたが、戦争に關するものゝみは態と後廻しにして置いた。さて、縦令それが本能として賦與せられたものにせよ、社會生活爲して群居する昆蟲の集團が次第に大きくなり、その食物探求區域が擴張せらるゝにつれて、境を接する他の集團との間に利害の衝突を來すのは必定であるから、此場合兩集團の間に戦争が起るのも亦自然の勢である。多くの動物學者は之を彼等昆蟲の理智判斷によつて宣戰蹴起するものの如くに信じて居るが、それは昔の動物心理學者の考で、かゝる事情の下にはかゝる本能の發露す可きやうに遺傳的に定められてあると見る可きである。而して之は決して戦争に關してばかりではない、職蜂職蟻の増數を必要とするときに卵が餘計に産まれることでも、巢の中に不

時の侵入者があるときに協力して對策を講ずることでも、其他あらゆる行動の場合でも皆同一であつて、何故にかゝることを爲し始めるかは爲す者自身は會得して居らぬ。之を知るものは大自  
然あるのみである。

蟻の社會生活には尙奇異なる一方向の進化が起つて居る。それは何かといふと、蟻が社會の個員を増加する常規の手段としては女王が充分なる營養を與へられて盛んに産卵し職蟻が之を孵育して一匹前に育て上げるのであるが、簡便法として他種の蟻の巢を襲撃して、その幼蟲や蛹を掠奪し、之を所謂奴隸として使用する手段がある。而して之には女王自から他の巢に侵入して少數の蛹を誘拐する場合もあるが、又數百數千の戰鬥専門の職蟻(即ち兵蟻)が自巢から正々堂々と繰り出して一齊に他種の巢中に突撃し、激戦の後、手に手に掠奪した幼蟲や蛹をかざして凱旋し來るやうなのもある。有名なる蟻學者フォーレルが觀察した處によるとボリエルグス、ルフエスセンスなる一種は一夏五十二日間に奴隸狩に出征したこと四十四回、其内二十五回は成功して引き上げたといふ。詰り此種に於ては之が常規の個員増加方法である。而して此種は奴隸掠奪に於ては最も巧なと考へられる蟻である代り、奴隸が居て食はせて呉れなければ食糧山積の間に坐して居乍ら餓死する程に特化したる性質の持主である。因に此の如き襲撃は常に奴隸狩のために行はれるもので、他種の巢中に貯へられたる食物を掠奪して運び去ることは、あつてもよさうに考



へられるが、事實上は未だ知られて居ない。即ち單獨又は數匹協力して強盜をやる動物はあつても、社會生活として貯藏食物を強奪する動物は奇妙にも無いのである。

要するに社會生活の進化と共に昆蟲類の中に、人類國家間の戦争に比す可き現象が現はれて居るのは事實であるが、然し之は本能としての話であるから、全然同一と見做すわけにはゆかぬ。

#### 第四 獨棲動物の不時の増數に伴うて起る戦争

昔から雀合戦とか蛙合戦とかいふ風に、奇異なる戦争が種々の動物に就て語り傳へられて居るのがそれである。然し古今東西ともに其記事に精確なものが無いので、充分な批判は不可能である。従つて茲に第四項として擧ぐるものは他の三項程確實なる結論ではないが、假りに次の如くに説明して置かう。先づ、恰かも平素單獨に生活する動物が、不時の激増によつて移住本能を生じ俄に一群に集合し、且つ或方面に運動を起すと同様に、一地方に於ける一種動物の個數が或限度以上に達したときに、急に戦闘性が現はれて、彼等相互に殺し合ひ、全體としての數を減ずる方法も、決して有り得ないことではない。頗る變則なる手段ではあるが、種屬保存のプリンシプルから云へば一同が共倒れになるよりは勝つて居るからである。

雀やカハラヒツの類には尙一つの有名な習性がある。それは梟や鷹の周圍に集つて喧しくさへ

づる奇性で、俗には鼻が晝間眼の見ぬぬを利用して嘲笑するのだと信せられて居るが、然し之を報復とか嘲罵とかに解するは無理であらう、寧ろ興奮して發する仲間の奇聲によつて多數集合し來るのであらう。此仲間を反射的に呼び集める本能的の信號方法は随分多くの種類に存するらしく、昔から「鳥寄せ」といつて口笛で野生の各種の鳥を間近く引き寄せる技術が行はれ、現に静岡縣の須走にもその名人が居る。要するに、獨棲性の動物がどうかした原因で俄に多數集合すること竝に相戦ふことは、階分あり得ることで、動物個々の一生涯に必ずしも一回も起らぬやうな状況に對しても、或種の本能を準備して置く大自然の用意を認めないわけには行かぬと思ふ。

## 人類の戦争との比較

以上述べた動物界の闘争の各種を人類の場合と比較すれば、頗る興味ある類似異同の點が少くないやうである。第一の利益を前にして智能的の争をする所は、程度に於ては著るしく進んで居るけれども、兎も角も同一性質のものご考へてよからう。第二の生殖に關聯しての闘争には、人類に於ては寧ろ第一の利害打算の場合も多く交つて居るが、然し又若き男女が興奮して無暗に飾つたり饒舌つたり、又は踊つたりすることには、幾らか性的刺戟發達の「觀せ物」式的要素が含まれてあるかも知れぬ。直接性慾に關係なき角力や武技が不思議に或女子の讃仰の的となるのも、

之に關係あるかも知れぬが、然し人間の場合には崇敬から容易に戀愛に代る混線式の天性もあるから、此問題は精神分拆學者のいふ様に簡單に論ずることは出来ぬ。第三の社會生活の必要に伴う戦争は、外觀的には酷似して居るけれども、嚴密にいへば、戦闘掠奪を常習とする昆蟲の場合には、その行動は生産進化の道程として賦與せられた構造若しくは本能に基づいた必然のものであるが、人間の場合はそんな必然的な避く可からざるものではない、人間は社會生活でなければ一日も生きてゆけぬと云ふ性質は貫つて居らぬ、否むしろ貫つて居るのは單に家族生活のための性質、それで居て社會生活をしたり、戦争をしたりするには別の理由がある、(他日再論すべし)。第四の不時に發する獨棲動物の闘争本能に就ては、今の處何とも云ふことは出来ぬ。唯群集心理の起源などを考へる學者には重要な材料かも知れぬ。然し兩國民間に戦争の勃發するときに、此雀や鳥の闘争本能と同じものが兩國國民の心に萌れ出でるとか、豫てから潜んで居たのが頭をもたげるとかいふことは甚だ疑はしい。人類の闘争本能なるものは(小兒の遊戯を別として)未だ一個の假設物であつて、今日の心理學者は、人心の構成をそれ程明瞭に指摘するだけに、本能なるもの、精確なる智識を有つて居らぬと思ふ。